

# 教 仏 名 聞

第7号  
(発行日)

2011年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○共学会—毎月6日午後7時始

○真宗入門講座—毎月18日

午後6時半始

\*8月22日の同朋の会と8月

12日の念仏座談会はお休み

## 子と喪える母に

時々、親族の葬儀に参列し、ご遺体を火葬場に野辺送りをするところがある。三時間ほどしてお骨を拾いに行く、葬場の釜から故人の骨と灰がドツと目の前に出される。その時にいつも「親しくしていたあの人がいたいほどに行つたのか」という、さびしきとともに何とも言えない不可解な思いに圧倒される。これは多くの人が一瞬なりともそう感じるに違いない。しかし、この不可解な問いには答えが見つからない。だからもやもやしながらも、しばらくすると日常生活の意識にもどつて、それ以上「あの人はどこへ行ったのか」を真面目に問うことをしなくなる。

しかし、これが他者ならそれで済むかもしれないが、可愛い我が子が先だつて死んでしまうと、不可解もさることながら大きな歎きが長く伴う。こういう問題に答えること

は昔も今もほとんど不可能のようにも思える。ただ悲しむ人のそばにいて、その人の嘆きを共感をもつて聴いてあげること以外には何もできそうもない。

しかし、こういう答えのないような、悲歎をとまなつた問いに対して、仏法の智慧から説かれた言葉が經典にしている。

それは『テーリーガーター』という古い經典に出てくるパターチャーラーという尼僧さんの言葉である。彼女は釈尊のすぐれた弟子であり、尼僧たちの指導者であった。彼女は子を喪つた大勢の女たちにこう語っている。

「その子が来たりまた去つて行った道をそなたは知らず、またその子がどこから来たかも知らないのに、『わが子!』といつて、そなたは泣き悲しむ。

請われぬのに、かれは、そこからやって来た。

《東日本大震災で被災された方々に心より御見舞い申し上げます。》

また許しを得ないのに、かれは、ここから去つて行った。かれは、ここから、一つの道を通つてやって来た。かれはそこから、他の一つの道を通つて行くであろう。

人間の形をとつて死んで、輪廻しつゝ過ぎ去るであろう。来たときのようなすがたで、去つて行った。そこに何の悲歎をする要があるうか」

(『尼僧の告白』より)

この言葉は多くのことを語っているように思われる。

まず、自分の子は自分が産んだ(自分のもの)であるかのように思い、(わが子!)といつて泣き悲しんでいるけれども、子は自分のものではない。あなたの胎内を通過してこの世に現れてきた(なにか)であつて、あなたが作つたのではない。子はあなたの胎内に宿つてこの世に生まれ出てきた。あなたはいわば通過点にすぎない、と言われるのである。

それでも産まれると可愛いという強い情愛が自然に起こり、可愛いゆえに苦勞を厭わず育ててきたのである。

その子がどこから来て、死んでどこへ行ったのか、まるで知らないが、出産して初めてその子と出遇つた。今まで全く知らなかつた者が、縁あつて親子となつて出遇つたのである。そして死の縁が来て、また去つて行ったのである。しかるに元から(わが子)であると思ひ、自分のものであるかのように愛着して泣き悲しんでいるのである、と。

そして「請われぬのに、かれは、そこからやって来た。また許しを得ないのに、かれは、ここから去つていった」と言われる。

その子に対して「どうか私のところに生まれて下さい」とこちらから懇願し、請求したから、私の胎内に宿つたのではない。私がお子の子を名指

しで（我が子になつてくれ）  
とたのんだのではないのに、  
はからずもあの子は私のとこ  
ろにやつてきて宿つたのであ  
る。

また「私から去つていつて  
いい」と許可したから、去つ  
て行つたのではない。「去つ  
ていかないで」とどれほど懇  
願しても、あの子は忽然とし  
て去つて行つたのである。知  
らない人が我が家に訪れて、  
そして去つて行つたように、  
と仰せられるのであろう。

人間である両親を縁とし  
て、一つの道を通つて人間世  
界にやつて来た。そしてしば  
らく人間としての生涯を送  
り、やがてこの世を去り、ま  
た別の一つの道を通つて何も  
のかとして次ぎに生まれる。  
子は人間の形体を得て生ま  
れ、人間の形を終えて、去つ  
て行つた。

どこからか来て、人間とい  
う形を通過して、また次の形  
体を取る。そういう輪廻の流  
れの中にある存在、それがい  
のちあるものすがたである。  
だから、我が子が死んだか  
らといって悲歎する必要はな  
い。また次の生を受けていく  
であろう、とパターンチャーラ

ー尼は仰せられるのであろ  
う。

子供を喪つて出家した多  
くの尼僧はこの説法を聞いて  
「ああ（パターンチャーラー尼  
様）、あなたは、わが胸にさ  
さっている見がたい矢を抜い  
て下さいました。あなたは、  
悲しみに打ちひしがれている  
わたしたちのために、娘の  
（死）の悲しみを除いて下さ  
いました。いまや、そのわた  
しは、矢を抜き取られて、妄  
執の無い者となり、円かな安  
らぎを得ました」（『尼僧の告  
白』より）  
と告白している。

パターンチャーラー尼の説法  
から教えられることは、お互  
いに見知らぬものが母となり  
子となつて、初めてこの世で  
出遇つたのである。

「こんにちは、赤ちゃん」  
という歌が若い頃、はやつた  
ことがある。この言葉は、そ  
ういう出遇いを表す言葉とし  
てなら、意味の深い言葉であ  
る。今まで見知らぬものがこ  
の世で不思議な深い縁があつ  
て親子となつて出遇う。出遇  
つてみれば、親は子を愛さず  
にはおられない。それが生き

ているものすがたである。  
しかるに愛情を傾けて育て  
ていると、いつの間にか「私  
の子、私のもの」と思うよう  
になり、愛執が強くなる。  
親の愛によつて子が育つ  
のであるが、親の愛は「親の慈  
悲」とは言わないように、そ  
れは慈愛ではあるが、しかし  
愛執でもある。それゆえに親  
は愛するゆえにまた悲しみや  
嘆きや心配がやまない。それ  
がこの世の親子のいつの時代  
においても変わらぬすがたで  
ある。

パターンチャーラー尼は言  
う。死んだ子供は、この世で  
の親子の縁がなくなつてこの  
世から去つて行つた。去つて  
行つたけれども、無になつた  
のではない。この世で死んだ  
ということはまた次の世に生  
まれて行くことなのだ。死の  
縁が来てこの世を去るが、ま  
た次の世で新たな形を受ける  
であろう。あの子はもうこの  
世にはいないが、しかし次の  
世にまた生を受けるであろ  
う。

親子であろうが夫婦であろ  
うが、友人であろうが、お互  
い人間同士の絆は、この世か  
ぎりでの因縁である。

ここで説かれる輪廻の説法  
は、いのち（人）は死んだら  
骨と灰、いわば煙のようにな  
り、無になつてしまふというは  
かなく存在ではなくて、なお存  
続していくのである。だから  
嘆くことはいらぬという、  
肯定的な意味での輪廻であ  
る。

ただ、そういう輪廻がやが  
て終息し、浄らかで安らかな  
涅槃に入るのが理想であ  
り、仏教の目的である。

このような話は現代人には  
なじみにくいかも知れない。  
しかし、最愛の者（子供や妻  
や夫）を亡くした嘆きがどこ  
で除かれるのであろうか。現  
代においてもこの問題に対す  
る答えは困難である。普通は、  
そのうちに時が流れて、嘆き  
が薄れていくのを待つだけで  
ある。

しかるに、このパターンチャ  
ーラー尼の説法は、存在の奥  
深い意味から説き起こし、子  
供を亡くした母親の嘆きのも  
とにある子への執着や愛執か  
ら開放して、大いなる安らぎ  
を与えたのである。

ただ、私たちは一人一人、  
親も子も、夫も妻も流れ流れ

ていく存在であるにもかかわ  
らず、はかりなき光であり  
のちである阿弥陀仏の光明の  
中の存在である。これが生き  
ているもの全てに恵まれてい  
る根本の真実である。

だから私たちは流転してい  
る存在であるが、そのような  
私たちに、生きている者も死  
んで去つていった者も、とも  
に阿弥陀仏の広大な大悲の光  
明のはたらきを受けているの  
である。そのはたらきは南無  
阿弥陀仏となつて生きとし生  
けるものを常に喚び続けてお  
られる。

この阿弥陀仏の光明に喚び  
覚まされるとき流転輪廻は  
終息し、大涅槃である浄土  
に至りて、もはや生まれるこ  
ともなく死ぬこともない阿弥  
陀仏の清浄ないのちに摂め取  
られるのである、とお聞かせ  
いただいている。

この広大無辺な大悲の恵み  
をいただくところに、私たち  
の真実の救いがある。（了）



雪割草

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十八)

印度西天之論家

中夏日域之高僧

顯大聖興世正意

明如來本誓應機

書き下し(印度、西天の論家、中夏・日域の高僧、大聖興世の正意を顯し、如來の本誓機に應ぜることを明かす。)現代語訳(インドの菩薩方や中国と日本の高僧方が、釈尊が世に出られた本意をあらわし、阿彌陀仏の本願はわたしたちのためにたてられたことを明らかにされた。)

G 「印度・西天および中夏・日域というのは」  
D 「印度・西天はインドのことです。中夏は中国、日域は日本のことです」  
G 「ではインドの論家とは」  
D 「論家とは仏教の深い道理を論理的に説明し、明示した偉大な菩薩方のことで、ここでは龍樹菩薩と天親菩薩の二人のことです」  
G 「中国と日本の高僧とは」

D 「中国の曇鸞・道綽・善導の三人の高僧であり、日本では源信と法然の二人の高僧のことです。全部で七人の高僧が、大聖である釈尊がこの世に出られた正意(本意)を明らかにして下さったと仰せられるのです」

G 「釈尊がこの世にお出まし下さった本意とは何ですか」  
D 「それは阿彌陀仏の本誓いわゆる本願を私たちに説き示すのが、釈尊の本意だといわれるのです」  
G 「なぜですか」  
D 「彌陀の本願は一切衆生の根機に應じ、どのような人も見捨てることなく、救いの手をさしのべて下さる、そういう普遍的な救済を説くのが釈尊のご本意だからです」

G 「では彌陀の本願以外の仏教はどうなのでしょう」  
D 「彌陀の本願以外の仏教は聖道門の仏教といわれますが、その仏教は易しくいえば、私どもが釈尊を見習って釈尊

のような生き方に私たちの方が応じていく道です」

G 「聖道門の仏教は、私の方が釈尊の生き方に應じ、釈尊にまねていく道なのですね。では彌陀の本願はどのような教えですか」

D 「彌陀の本願は、逆に阿彌陀仏の方が私に應じて今の私をまるまる救いたもう法です。たとえて言えば、聖道門は足袋に私の足を合わせようとするような教えです。足袋が大きかったらだぶだぶで歩けず、小さかったらこちらの足を削らなくてはなりません。ですから大変困難な道であると言えましょう。一方彌陀の本願の教えは、阿彌陀仏によって私たちの足の大きさに合うように仕上げて下さった足袋のようなもので、そのままその足袋をはかせてもらうだけでいい教えです」

G 「わかりました。ではここでいう機とは」  
D 「普遍的な真実を法といい、その法の働きに反応するものを機と言います。機とは要するに法に対するそれぞれの人のことです」  
G 「このままの私に應じて救いたもうのが阿彌陀仏の本願

のことですが、それは具体的にどのような内容なのか」

D 「阿彌陀仏は(汝のそのすがたのままなりを助ける、引き受ける)と働きたまい、喚びかけたもう阿彌陀仏の本願力のお助けです」

G 「その本願力はどこに働いていますか」

D 「今、南無阿彌陀仏と喚びかけて下さっています。その喚びかけが煩惱の塊である私にこだまして南無阿彌陀仏とお念仏申されているのです。お念仏の声となって、(助けらる)浄土に生まれさせる)と現れて下さっています」

G 「そうすると、七人の高僧方は、釈尊がこの世にお出まし下さった本意は、一切衆生一人ひとりのありのままに應じて救うて下さる彌陀の本願を説かんがためであると、七高僧それぞれに仰せ下さったのですね」

D 「ええそうです。そして、そういう彌陀の本願の仏教こそが大乗仏教そのものである、その本質であり、本流であるとお示しになったのが親鸞聖人です。それまではお念仏の教えは聖道門の教えの傍らに説かれた、程度の低

い仏教のように思われていたのです」

G 「仏教の傍流のように理解されていた本願の仏教、それが仏教の本来であり本流であるとお示しになったのですね。では聖道門の仏教は何のために釈尊は説かれたのでしょうか」

D 「私たちを彌陀の本願に引き入れるためのお手立てとして説かれたもので、そういう教育的な手段があつて、私たちは自分の能力の限界を知り、彌陀の本願のお助けを受け入れることができるのです。そのように私たちを養育するための教えとして聖道門の仏教が説かれたのだと、聖人は仰せられています」  
G 「分かりました」

(了)

### 【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-20-2112

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・

信仰上の相談・仏事の相談

\*相談員が留守のときがありますので予めご了承ください。

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(5)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

○恩にも着るぞや、礼も云うぞや。どうか助かりてくれよと仰せらるる。それをよそごとに聞いておるで胸がさっぱりせぬのじゃ。

(法蔵菩薩様は、純粹で淨らかな願と行、思惟と修行、認識と実践を遂行され、それが実現して淨土は私たちに開かれ、阿彌陀仏という救い主となられ、救いの船は南無阿彌陀仏となって、流転の海に浮沈しつつある私たち一人ひとりに、(助けるぞ) (助かるぞ) (助かってくれよ) (助けずにはおかぬ) (助けさせてくれよ) (助けてみせる)と働きづめに働き、喚びづめに喚んで下さっている。そして南無阿彌陀仏を聞いて「ああ、助けて下さる」(引き受けて下さる)と受け取ってくれなら、気がついてくれるなら、(恩にもきるぞよ) (礼も云うぞや)とまで、仰せ下さるのである。それほどまでも私が助かることを願っておって下さるのである。どこどこまでも助けずにはおかぬの南無阿彌陀仏のみ心をよそごとに聞いているから、いつまでたつてもぐずぐず言い、うろろうろして、ラチがあかぬのである。)

○ある人云く。有り難きとおも意ほど恐ろしき心はなしと申されしと云々。

(聞法生活上でしばしばおちいりやすいのは、阿彌陀仏のご恩やお慈悲にこそよりのみ、目をとめなければならぬのに、ともすると自分の心のありさまに目が向きがちになる。そして助かる証拠やしるしを自分の心の内に認めようとしたり、確かめようとしたり、見つけようとするのである。お聞かせいただく南無阿彌陀仏よりも、それを聞いている私の心に助かるしるしや色合いを見ようとする。喜ぶ心があれば「これでこそ助かるのだ、すでに助かったのだ、淨土に生まれさせていただけなのだ」と思う。仏法を聞いて有難い心が我が心に起こると、これでこそ大丈夫であると思う。そうして知らず知らず、自分が淨土に生まれることができるのは自分の心の中にある信心や有難い心があるからだと思ってしまう。そうすると、逆に喜びが少なくなったり、薄くなったり、感動が乏しくなると、これでは駄目だ、まだ助かってない、もっと喜ばなくては淨土には参れない、などと思う。これみな、自分の心をたのんでいるのであって、阿彌陀仏をたのんでいるのではない。あてにならない我が心をたのみにしているのである。この心は喜べたり喜ばなかったりでちつとも当てにならない。我が心の喜びの有無、信心の有無、感動の有無によらず、まっ

たく如来様ばかりにて助けて下さることを聞くのである。南無阿彌陀仏様こそが私の助かる証拠。南無阿彌陀仏の他に助かるしるしはいらない。南無阿彌陀仏は、阿彌陀仏が「汝の往生は彌陀がすべて引き受ける、汝の手出しは何もいらぬぞ」との仰せ。「汝を助ける、間違いないぞ」との如来様の決定である。それを聞かせただけでほかに自分の心をチリほども当てたよりにはしないのである)

○丸々他力と云うは如来様のお一人働きにて往生なさしめてくださるなり。

(お念仏を称えることができるのは、名号をご回向下さることによつてである。信心が起ころのは無碍光のお心が私に届いて信心となつて下さるからである。淨土に生まれ仏になさしめて下さるのはみな如来様のご回向のたまものである。そして仏となつて衆生救済の尊いお仕事に入らしていただくのは還相回向の恵みによつてである。すべて彌陀の本願力のおかげである。丸々他力である。

仏法を聞こうという志は私が起こしたと思いがちであるが、仏法を聞きたい、仏になりたい、淨土に生まれたい、という心を起こさせて下さるのは阿彌陀仏の智慧光のお働き

である。愛欲・名利・勝他の心ばかりの私。健康が第一でいつまでもこの世にありたいと思うばかりの者が、少しなりとも真に助かりたい、仏法が聞きたい、淨土に生まれたいと願う心が起ころのは如来法蔵様のご苦勞によつてである。『弥陀如来名号徳』に聖人が

「智慧光と申すは、これは(法蔵菩薩が)無痴の善根をもつて得たまへるひかりなり。無痴の善根といふは、一切有情、智慧をならひ学びて無上菩提にいたらんとおもふころをおこさしめんがために得たまへるなり」と

お示しになつておられる。仏法の智慧を聞きたい、仏法を学びたい、仏(無上菩提)になりたいとの願いが起ころのは、法蔵菩薩様が成就してくださつた智慧光の力によつてであるとのこと。それであるのに、私が殊勝な心を起こしたのだと思うのはもうしわけないことである。こんな私にどうしてこれほどのなさげがかけられたのか、大悲の不思議である。南無不可思議光仏)

(了)

## 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(金) 午後二時始

講師 藤枝宏壽師 (福井県越前市)